



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

# ライフコース視点での消費者行動研究：その方向性と課題

著者	青木 幸弘
雑誌名	商学論究
巻	66
号	3
ページ	33-56
発行年	2019-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027785">http://hdl.handle.net/10236/00027785</a>

# ライフコース視点での消費者行動研究

## —その方向性と課題—

青 木 幸 弘

### 要 旨

ライフコース・アプローチとは、近年、社会科学や行動科学の分野において、既存領域の境界を超える形で登場してきた研究枠組であり、人生の先立つ段階における経験が、その後の消費者行動のパターンにどのような影響を与えるかを理解する上で役立つものである。すなわち、それは、経時的な消費者行動の変化に着目し、そのような変化を様々なライフ・イベントの生起と関連づけ、且つ歴史的および社会・文化的なコンテキストの中において分析するための研究枠組を提供してくれる。本稿の目的は、このような経時的な消費者行動の研究、特に消費パターンの形成と変化を研究するための分析視点としてライフコース・アプローチを取り上げ、その有用性を示すことにある。

キーワード：ライフコース (life course)、消費者行動研究 (consumer research)、消費者行動 (consumer behavior)、ライフ・イベント (life event)、ライフコース・パターン (life course pattern)

## I 問題の所在

文字通りの意味において、本稿で議論の対象とする「ライフコース」(life course)とは、まさに“人生の道筋”のことであり、「人が一生をかけて歩む道筋 (pathway) の総体」を指す概念である (時として、それは「人生行路」とも呼ばれる)。

これまで、消費者行動の研究者たちは、過去の人生経験がその後の消費者

行動（特に、消費パターンの形成と変容）に与える影響の重要性を認識しつつも、それを適切な形で分析するための理論的および方法論的な基礎を、十分には持ち合わせてこなかった。その結果、消費者の人生経験における経時的な変化やそれへの消費者の対応、そして、その後の消費者行動への影響などについて、限られた知見しか持っていなかった（Moschis 2007）。

本稿で取り上げるライフコース・アプローチとは、社会学（家族社会学、加齢の社会学）や生涯発達心理学の分野において1970年代に登場し、その後、既存領域の境界を超えて発展してきた研究枠組であり（Clausen 1986; Mayer and Tuma 1990; Elder et al. 2003）、人生の先立つ段階における経験が、その後の消費者行動のパターンにどのような影響を与えるかを理解する上で役に立つものである。すなわち、それは、消費者行動の経時的な変化に着目し、それを様々なライフイベントの生起と関連づけ、歴史的および社会・文化的なコンテキストの中で分析するための有効な研究枠組を提供してくれる。

本稿の目的は、このような経時的な消費者行動の研究、特に消費パターンの形成と変化に関する研究において、ライフコース・アプローチが果たし得る役割、特に、その理論的・方法論的な有用性と可能性を示すことにある。

このため、まずは次の第Ⅱ節と第Ⅲ節において、ライフコース研究における基礎概念の整理を行う。その上で、続く第Ⅳ節で、ライフコース視点で消費者行動を研究するための概念枠組や先行研究を紹介する。そして、最後の第Ⅴ節で、今後の展開方向と課題について述べ、本稿の結びとしたい。

## Ⅱ ライフコース研究の視座と背景

### 1. ライフコースとは何か

前述のように、ライフコースとは、“人生の道筋” のことであり、「人が一生をかけて歩む道筋の総体」を指す概念である。

この分野の基礎を築き、長きにわたって先導的な役割を果たしてきたElderによれば、ライフコースとは「個人の生涯における人生上の出来事（life event）や社会的役割（social roll）の配列（sequence）のこと」である。

より詳しくは、「年齢別に区分された一生涯を通しての人生行路（軌道：trajectory）のことであり、すなわち、人生上の出来事についての時機（timing）、期間（duration）、間隔（spacing）、および順序（order）に見られる社会的パターン」としている（Elder 1978）<sup>1)</sup>。

この定義が示すように、個人のライフコースは、人生上の出来事（ライフイベント）の生起と社会的役割の取得（および喪失）によって構成される。そして、それらがいつ、どれくらいの期間にわたって、どのような間隔や順序で生起するのかを、時間軸に沿って分析すること、更に、何故当該ライフコースが特定個人によって選択されたのかを解明すること、これがライフコース研究の要となる（菅原 2005）。

ところで、ライフコース選択は、当事者の個人的状況によって異なるだけでなく、当該個人の生活が埋め込まれている地理的・社会的・時代的条件の影響も大きく受ける。と同時に、各個々人がどのようなライフコースを選択し自らの人生を築いていくかは、社会のあり方に影響し時には大きな社会変動にも繋がっていく。従って、ライフコース研究とは、個人の人生選択と社会変動との相互作用の解明を目指した研究領域だと言える（菅原 2005）。

## 2. ライフイベントと役割移行

人々が一生涯の間に経験する人生上の出来事（ライフイベント）には、先だって予想することができ、且つ大部分の人々が実際に体験するような出来事（標準的イベント：normative events）と、必ずしも総ての人々が体験するとは限らない出来事（非標準的イベント：non-normative events）の2つのタイプが存在する。

例えば、出生後、人々は様々な通過儀礼を経て成長し、その多くは幼稚園・

1) 大久保（1990）によれば、この Elder の定義は、ライフコース自体の定義ではなく、ライフコース・パターンの定義として解釈すべきものであるという。すなわち、ライフコースの変化をコーホート間で比較する場合、比較可能な測度群を用いて操作可能に定義する必要があるが、この Elder の定義における時機・期間・間隔・順序は、まさに比較のための測度だという（55頁）。

小学校・中学校・高等学校を経て大学へ入り、その卒業後、就職・結婚して子どもをもうけ、子の独立、本人（あるいは配偶者）の退職、配偶者の死、そして本人の死亡によって人生の幕を閉じるが、これらは親も子も孫も繰り返していく標準的イベントである（そして、これらの標準的イベントの平均的な系列パターンはライフサイクルと呼ばれる<sup>2)</sup>。これに対して、戦争・災害・病気・事故・失業・離婚などの不時の出来事は、必ずしも総ての人がそれを経験するとは限らない非標準的イベントである（青井 [1999]、5 頁）。

また、個人は、一生涯の間に、ライフイベントごとに様々な社会的役割を取得・喪失していくが、これを「役割移行」(role transition) と呼ぶ。例えば、結婚に伴い夫ないし妻の役割を取得し（離婚の場合には喪失）、出産に伴い父親ないし母親の役割を取得するといった具合に、である。加えて、こうした役割ないし地位は、ある期間持続したり、あるいは、それらが重なって1つの系列となるが、これを指して「経歴」（キャリア：career）と呼ぶ。主な経歴としては、以下のようなものがある。

家族経歴：結婚、子どもの誕生、親の死、配偶者との離死別といった家族役割の取得・喪失に関わるライフイベントの連鎖。

教育（学校）経歴：入学、進級、留年、浪人、進学、卒業といった教育上のライフイベントや役割移行の連鎖。

職業経歴：就職、転職、転勤、休職、失業、昇進、独立（開業）、定年退職、引退といった職業領域におけるライフイベントや役割移行の連鎖。

これら以外にも、居住経歴（転居の経歴）、友人経歴（友人関係の変化の経歴）、社会活動経歴（サークルや団体への参加や離脱の経歴）、健康経歴（病気や怪我の経歴）、内的経歴（ものの見方や考え方の変化に関する経歴）などを想定することができる（大久保 2013）。

このように役割移行は、社会構造内部の各領域での個人の位置変化と結び

2) 一般に、ライフサイクル (life cycle) とは、生物の一生に見られる、個体の発生から消滅に至る循環のことであり、「生命周期」と訳される。人間のライフサイクルも、出生－成長－成熟－老衰－死亡といった規則的な推移を辿るが、これを家族の生活周期として捉え直したものが「家族ライフサイクル」(family life cycle) である。

についており、それぞれに人生の「軌道」（トラジェクトリー：trajectory）を描いている。また、それらの各経歴（軌道）は決してバラバラではなく、相互に関連し合っている。従って、ライフコースは「相互に依存する経歴（軌道）の束」として捉えるべきものでもある。

尚、役割移行を引き起こすきっかけを「転機」（turning point）、生き方の大きな変更を伴う移行を「危機的移行」（critical transition）と呼ぶ（表1にライフコース関連の中核概念および用語の簡単な説明を示しておく）。

表1 ライフコース研究における中核的概念

- 
- ライフコース（life course）：加齢に沿ったライフイベントと役割取得（喪失）の社会的な配列パターン。
  - ライフイベント（life event）：新たな適応を必要とする人生上の出来事。
  - トランジション（transition：移行）：ライフイベントを契機とした役割の取得・喪失（役割移行）、役割の取得・喪失による生活の変化（生活移行）。大きな生き方の変化を伴う時は「危機的移行」（critical transition）という。
  - ターニング・ポイント（turning point：転機）：移行を引き起こすきっかけ。
  - トラジェクトリー（trajectory：軌道）：社会構造のある領域における役割移行の系列。経歴（キャリア：career）と同じ概念。
  - ライフヒストリー（life history）：個人の生活記録、ライフイベントの年代史。生活史。
  - コーホート（cohort）：共通の出来事を同時代に経験した人々の集団。同年生まれの出生コーホートなど。
- 

出所）菅原（2005）273-274頁より作成。

### 3. ライフコース研究の源流

ライフコース論の源流には、生涯発達心理学（life-span developmental psychology）と加齢の社会学（sociology of aging）という2つの流れがあり、それらが1970年代に合流して、一生涯にわたる加齢という広い見通しが形成されていったと言われている。更に、そこに歴史人口学などの分野での手法（特に、コーホート分析の手法）が包摂され、ライフコースという強力且つ魅力的な概念装置が出現し、家族社会学の分野において発展していった（森岡・青井 [1985]、12頁）。

このように、ライフコースの分析視角は、生涯発達心理学での一生涯にわ

たる加齢過程の研究などを源流としているため、その中心的な前提は、①発達の変化は受胎から死亡までの生涯にわたる継起的過程であって、どれか特定のライフステージに限られるものではない、②発達の変化は生物的過程・心理的過程および社会的過程のセットからなり、これら3つの過程がライフコースの全期間にわたって組織的に相互作用する、③どの個人のライフコース・パターンも社会的・環境的变化（あるいは歴史）の影響を受ける、④ライフコースの新しいパターンは社会変動に影響する（すなわち、個人のライフコースが社会変動によって形づけられるだけでなく、新たなライフコース・パターンの集積が社会変動をつくり出していく）というものである（森岡・青井（1985）、13-14頁）。

すなわち、新たに登場したライフコース論の視点が従来のライフサイクル論と大きく異なるのは、発達を生涯つづく（life-long）過程とした上で、発達の多方向性、軌道の多岐性、個人間の多様性と個人内の可塑性、そして社会的・文化的環境の影響を認めた点にあり、これによって平均的でない規範逸脱的な家族（例えば、子どものいない夫婦、年齢差の大きい夫婦、晩婚夫婦、離婚―再婚夫婦など）も分析から除外されなくなった。

また、家族の発達過程の多様性・多岐性への注目は、各発達段階ごとに家族をまとめて観察することへの異議申し立てでもあり、家族を観察単位とするよりも、家族の中の個人に注目し、個人にとっての重要な他者（significant others）という位置づけで他の家族成員を登場させる、という方途が選択された。つまり、はじめに家族集団のライフサイクルありきではなく、まず最初に個人のライフコースに注目することから始め、その後に相互作用的な家族成員のライフコースを考慮に入れ、それらの集積態として家族のライフコースを捉える、という方法論的転換が行われたのである（森岡・青井[1985]、14-17頁）。

その後、ライフコースという概念や分析視点は、出発点となった社会学（家族社会学や加齢の社会学）や生涯発達心理学の分野だけでなく、周辺の関連領域（社会心理学、老年学、人口学、歴史学、労働経済学、政治学、生

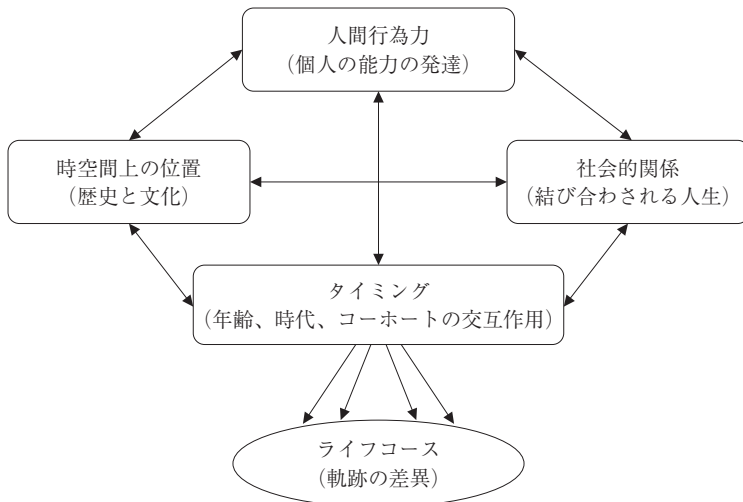
涯教育学など)にも浸透し、学際的な展開を遂げていった。また、理論複合的な分析視角 (multi-theoretical perspective) をとるライフコース研究においては、役割理論や象徴的相互作用理論、社会化に関する諸理論、ストレス理論、ソーシャル・サポート理論、アイデンティティ理論、転機や人生移行に関する理論など、数多くの理論に準拠して研究が展開していくことになる(菅原 2005)。

### Ⅲ ライフコース理論の基礎概念

#### 1. ライフコースを規定する4つの要素

上述のように、ライフコース論における基本的視点は、個人のライフコースを構成するライフイベントの生起や社会的役割の取得・喪失を、時間軸に沿って分析していく点にある。長きにわたりライフコース研究を牽引してきた Elder らは、ライフコースにおける軌道の差異を規定する要因として、図1に示される4つのものを挙げている (Giele and Elder 1998)。

図1 ライフコースにおける4つの要素



出所) Giele and Elder (1988)



まず、図中において、「時空間上の位置」とは、個人が置かれた歴史的・文化的・地理的な状況のことである。次に、「社会的関係（結び合わされる人生）」とは、家族と友人、教師、同僚といった人生において出会う「重要な他者」との対人ネットワークのことであり、ここでの対人的相互作用を通して、社会的な期待や規範が当該個人の内面に取り込まれていく。3番目の「人間行為力」(human agency) とは、ライフコース選択に当たっての主体的な決定能力のことを指す（それは個人の生涯発達の結果でもある。尚、Elderらは、これを目標志向性とも呼んでいる）。そして、最後の「タイミング」とは、ライフイベントが実際に生起する時機のことであり、それがいつ、どのような形で生起するのかは、他の3要素との関係、具体的には、年齢・時代・コーホート（同時出生集団）の交互作用によって決まるという（菅原 2005）。

## 2. ライフコース研究における3つの時間軸

このように、ライフコース論の分析視点は、個人の生涯発達と社会的関係、そして歴史・文化との相互作用の中において、ライフコースの軌跡を時間軸に沿って捉えようとする点に、その特徴がある。その際、時間の捉え方も複合的であって、次のような3つの時間軸が設定される（安藤 2003；嶋崎 2011）。

個人的時間 (individual time)：加齢や生涯発達に伴う身体的・心理的時間。

客観的には暦年齢を指標として把握されるが、主観的に認識される時間は、必ずしも年齢によって区切れない。

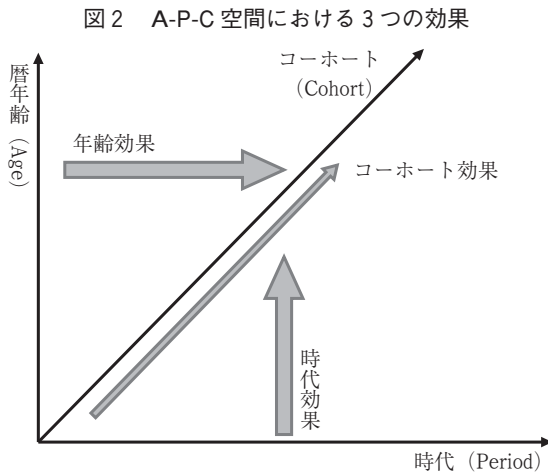
歴史的時間 (historical time)：歴史的事件（戦争、自然災害、経済的な好不況など）や社会構造の変動（制度・慣行の変更など）によって刻まれる繰り返しのない時間。

社会的時間 (social time)：社会的関係の経過として捉えられる時間。具体的には、家族周期を基礎とする家族的時間 (family time) や、職業生活の基礎となる産業（企業）的時間 (industrial time) などに分け

られる。

ライフコース研究では、これら3つの異なる時間軸を交差させ、その中に個人のライフコースを浮かび上がらせていく。中でも、個人的時間（生涯時間）を暦年齢で測った上で、それを歴史的時間と連結させて分析することが多い。

例えば、図2は、縦軸に個人的時間を暦年齢（Age）でとり、横軸を歴史的時間としての時代（Period）の流れで表したものである。また、図中の45度線は「コーホート」（Cohort）と呼ばれる集団（通常は、同一出生年の集団としての「出生年コーホート」）のライフコースを表しており、「A-P-C空間」とも呼ばれる。



出所) 嶋崎 (2008) 4 頁。

同図において、縦軸から45度線（特定のコーホート）へ水平に伸ばした矢印は、特定の年齢がもたらす加齢上の効果、すなわち「年齢効果」（age effect）を示している。一方、横軸から垂直に伸ばした矢印は、特定の歴史的出来事への遭遇がもたらす効果を表しており、「時代効果」（period effect）と呼ばれる。そして、45度の矢印で示される特定の歴史的出来事に特定の年

齢で遭遇したことの効果が「コーホート効果」(cohort effet)である。

後述するように、ライフコース研究においては、縦断的パネル調査によって複数のコーホートを追跡し、そこから得られたデータで、年齢効果、時代効果、コーホート効果の分離を試みることを、「コーホート分析」(cohort analysis)と呼んでいる。

尚、出生コーホート以外にも、同時期に卒業(入社)した「卒業(入社)コーホート」や結婚(出産)した「結婚(出産)コーホート」などがあり、これらを社会的時間(家族時間や企業時間)と重ね合わせることで、個人の生活変化を社会変動と関連づけることが可能となる(青井 1999)。

## IV ライフコース視点での消費者行動研究

### 1. 従来の研究方法における問題点

冒頭でも述べたように、消費者行動の経時的な変化については、以前より研究の必要性は認められていた。また、それなりに実証的研究も蓄積されてきている。

例えば、ブランド選好や店舗選好の変化(Andereasen 1984)、製品やサービスへの支出の変化(Wilkes 1995)、意思決定スキルと情報処理パターンの変化(John 1999)、製品取得の変化(Oropesa 1993)、新製品需要の変化(Gatignon and Robertson 1985)、買物依存と物質主義的態度の発達(Rindfleisch et al. 1997; Roberts et al. 2003)などに関する研究は、いずれも消費者行動の経時変化を実証的に研究したものである。

しかしながら、これら従来の研究は、ライフコース論で想定される人生の節目となるようなライフイベントの影響などを、必ずしも十分に捉えている訳ではない。また、方法論的にも、横断法で得られたデータの分析に依存する研究が多く、縦断法を用いて消費者行動の経時変化を扱おうとする研究はほとんど存在しない。すなわち、過去の人生経験がその後の消費者行動(特に、消費パターンの形成と変容)に与える影響の重要性は認識されつつも、研究の実状は不十分なままだったと言わざるを得ない。そして、それは、

消費者行動の研究者たちが、分析のための適切な理論的基礎や方法論を持たなかったことの結果でもあった（Moschis 2007）。

前述のように、既にライフコース概念が登場して40年近くが経過し、その分析視点や方法論は多くの研究領域に拡がりつつあるが、消費者行動研究への適用例は、米国においても意外なほどに少ない。勿論、その背景には、各種の効果を分離するためには縦断的データの収集が必要であるなど、方法論的なハードルの高さが壁となっている部分もある。しかし、ライフコース概念の理論複合的（multi-theoretical）な性格を考えると、今後、消費者行動研究の分野においても、より積極的な適用が求められるところである。

そこで、以下、米国におけるライフコース視点での消費者行動研究を紹介しながら、その適用の可能性と方向性について検討していきたい。ここでは、Moschis（2007）が提示した概念モデルを手掛かりに、ライフコース視点での消費者行動研究の枠組について検討する。

## 2. Moschis（2007）の論点整理と概念モデル

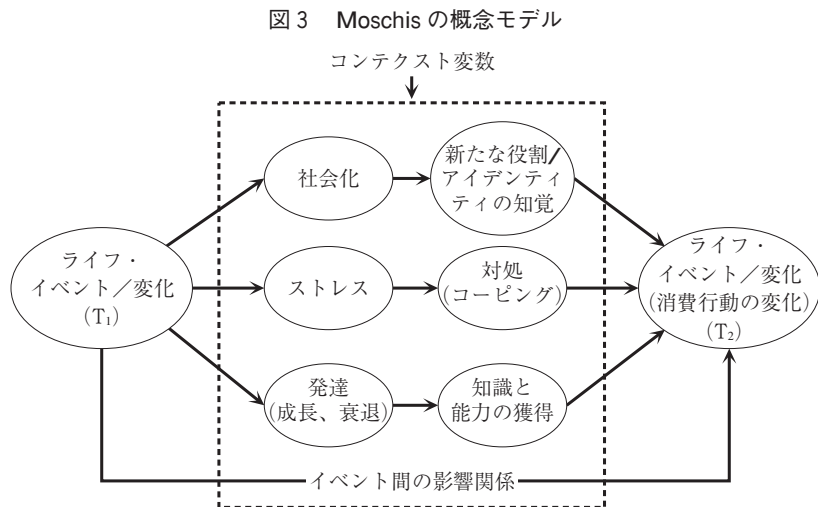
前述のように、米国においても、ライフコース視点での消費者行動研究は未だ少ない。そんな中、Moschis 達のグループによる研究は例外的な存在であろう。多分に彼自身の研究経歴も影響しているだろうが、米国以外での実証的研究も含めて、ライフコース視点での研究が継続的に行われている（Lee et al. 2001; 2012; Roberts et al. 2003; Benmoyal-Bouzaglo and Moschis 2009; Nguye et al. 2009; Baker et al. 2011; 2013）。

Moschis の研究経歴を振り返ると、過去に消費者の社会化プロセス（consumer socialization process）に関する研究に取り組み、その後、エイジング理論（aging theory）をベースに高齢者の消費について研究している。そして、近年、その延長線上において到達したのが、ライフコース視点での消費者行動研究であった（Moschis 1987; 1992; 1994; 1996）<sup>3)</sup>。

---

3) 但し、Moschis（1996）においては、既に分析視点としてライフコース概念が取り入れられている。

図3と表2は、その Moschis が、消費者行動をライフコース視点で分析する際の枠組を整理し、それを概念モデルとして提示したものである (Moschis 2007)。



出所) Moschis (2007), p. 297.

まず図3の概念モデルを簡単に説明するなら、左から右へという時間的経過をベースに、3つの部分から構成されている（尚、点線の枠内は、消費者の内的プロセスである）。

すなわち、①ライフコース上の特定時点  $T_1$  において生起するライフイベントとそれに伴う生理的・心理的・社会的な変化、②そのライフイベントや変化が引き金となって起動する3つの内的プロセス、③先行するライフイベントや3つのプロセスの結果として、時点  $T_2$  で生起する新たなライフイベントや変化（その中には、製品の購買や選好の変化、消費志向（consumption orientation）の変化、といった消費者行動の変化も含まれる）、という3つの構成要素である。

このように、消費者のライフイベント経験は、生理的・心理的・社会的な

表 2 3つの理論的視点と概念モデルの要素、および消費者行動での研究例

理論的視点	モデルの要素		消費者行動での研究例	
	ライフイベント/変化	プロセス	結果	
社会的規範と 社会化的理論	役割移行イベント	社会化	新たな役割の知覚・演技 アイデンの形成と変容、	Belk (1988) McAlexander et al. (1993) John (1999); Moschis (1987)
			製品処分の 態度、スキル、 価値の獲得	
ストレス理論	ストレスフル・ イベント	ストレス	買物依存症 対処行動 (コーピング)	O'Guinn and Farber (1989)
生涯発達理論 (人的資本理論)	生物学的、心理的、 社会的、環境的变化	発達 (成長 と衰退)	物質主義	Rindfleisch et al. (1997)
			アダプティクシヨン	Hirschman (1992)
			ブランド・店舗 選好	Andreassen (1984); Lee et al. (2001)
			消費能力	John (1999); McAlexander et al. (1993)
			情報処理	John (1999)
			広告への耐性	Gaeth and Heath (1987)

出所) Moschis (2007), p. 298 を一部修正。

変化を引き起こすが、そのような変化への「適応」(adaptation) プロセスとして起動するのが、「社会化」(socialization)、「ストレス」(stress)、「発達」(development) の内的プロセスである。そして、それら3つの内的プロセスは、表3に示されるような理論的裏付けを持ち、次のような内容になっている。

### ①社会的規範と社会化のプロセス

ライフコースは、社会的役割の配列であり、結婚、子どもの誕生、退職といったライフイベントを契機として、役割移行(配偶者、親、退職者などの新たな役割への移行)が生起する。また、このような役割移行の順序やタイミング、持続期間などを支配するのが「社会的規範」(social norm)である。

社会化のプロセスとは、このような社会的規範に従い、新たな役割に適合したスキルや態度を獲得していくプロセスである。そして、社会化の結果、人は新たな役割に合わせてアイデンティティを変容させ、また、活動内容も変えていく。

消費者行動の文脈においては、こうした社会化のプロセスに従い、所有物の変化や新たなスキル、態度、価値観の獲得などが生じる。

### ②ストレスと対処行動のプロセス

ライフイベントの生起により、多かれ少なかれ、以前の均衡状態が崩れ、新たな均衡に向けた再調整が必要となる。このため多くのライフイベントは、ストレスを生み出す要因、すなわちストレッサー(stressor)として位置づけられる<sup>4)</sup>。また、ストレッサーへの能動的な対処行動のことをコーピング(coping)と呼ぶが、時として、製品やサービスの購買や消費がコーピングの方略として用いられることも多い。例えば、買物や飲酒による気晴らしなどは、ストレスフルな状況における対処行動の1つである。但し、それらが過度なものとなる場合、買物依存症(compulsive buying disorder)やアディ

---

4) ストレッサーは、持続時間が短い急性の(acute)なストレッサーと、慢性的(chronic)なストレッサーと区別される。多くの場合、ライフイベントは、急性のストレッサーとして位置づけられる。

クシオン（addiction：嗜癖）などの弊害をもたらすことになる。

### ③生涯発達と適応のプロセス

生涯発達心理学の分野を拓いた Baltes によれば、環境との相互作用の中で個人の能力は生涯にわたって発達していくという（Baltes 1980）。従って、ライフイベントやそれに伴う新たな役割の取得は、知的成長（intellectual growth）の源泉でもあり、“将来の所得や消費に影響を与える”スキルや知識といった人的資本（human capital）の蓄積にもつながる。

消費者行動の文脈においては、情報処理能力や新たな消費スキルの獲得といった生涯発達と適応プロセスが、これに該当する。

尚、図3の  $T_1$  から  $T_2$  への矢印が示しているように、ライフイベント間には相互作用が存在し、あるイベントの生起が、他のイベントの生起確率を増大（減少）させる場合がある（例えば、子どもの誕生は、就業継続の断念といった他のライフイベントや親役割への移行を導く）。このような他のイベントの生起確率を増大（減少）させるイベントは相互作用的イベント（transitional event）と呼ばれる（Mayer and Tuma 1990）。

最後に、図3の上部にあるコンテキスト変数とは、当該消費者のライフコースが埋め込まれたコンテキストのことであり、プロセス全体に影響を与える構造的要因を指す。具体的には、歴史や文化といったマクロ・レベルの要因から、ジェンダーや家族構成といったミクロ・レベルの要因までの広がりを持っている。

以上のように、Moschis が提示した概念モデルは、ライフイベントと役割移行に焦点を当てたトランジション分析のための枠組であり、各種のアプローチを包含した理論複合的（multi-theoretical）な性格を有するものである。

## V 今後に向けた研究の方向性と課題

以上、本稿においては、ライフコース視点での消費者行動研究の意義と可能性を検討するために、その理論的基盤や方法論について整理した上で、米国における先行研究を跡づけてきた。特に、先行研究に関しては、トランジ



ション分析に主眼を置いた Moschis の分析枠組を紹介した。

最後に、今後に向けたライフコース視点での研究の方向性と課題について、特に、わが国における女性のライフコース変化と関連づけながら整理し、本稿の結びとしたい。

## 1. 多様化する現代女性のライフコース

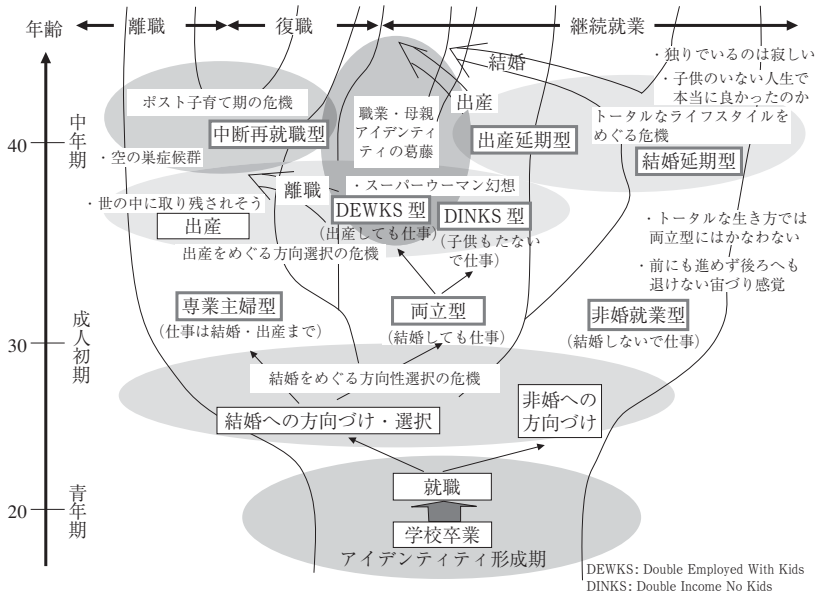
第2節で述べたように、ライフコース研究の特徴の1つは、個人の人生選択（ライフコース選択）と社会変動（社会構造の変化）との接合を目指している点にある。そして、このことを消費者行動研究の文脈において捉えるなら、ライフコース・アプローチは、市場構造の変化を読み解く上での重要な視点となることを意味する。

これまで何人かの家族社会学者たちが跡づけ検証してきたように、「家族の戦後体制」（落合 1997；2000）ないし「戦後家族モデル」（山田 2005）と呼ばれる日本の家族の特徴は、1970年代半ばより変容を余儀なくされ、それと同時に女性のライフコースも多様化し始めた<sup>5)</sup>。具体的な現象としては、専業主婦の数は1975年頃にピークを迎え、それ以降、共働き夫婦の増加に弾みがつく。また、平均初婚年齢が上昇し始めて未婚化・晩婚化が進み、合計特殊出生率も低下し始める。いわゆる「少子化」の進行である。夫婦と子供二人という「標準世帯」はもはや標準ではなくなり、高度成長期に出現した同質的なマス市場の変質と解体が始まった。そして、その背景には、多様化する女性のライフコース変化があったのである。

5) 落合（1997；2000）は、標準的ライフコースの出現メカニズムを要約して、①既婚女性の専業主婦化（「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業）、②二人っ子化（産児数制限による再生産平等主義）、③核家族化、という3つの特徴を挙げ、これを「家族の戦後体制」と呼んだ。そして、これら3つの条件は、1955年から75年までの20年間には成立したが、その後は皆失われたと主張する。また、山田（2005）は、この落合の議論を踏まえつつ、「夫は仕事、妻は家事・子育て」という戦後に形成された家族のイメージないしモデルを「戦後家族モデル」と名付けた。そして、「戦後家族モデル」は、1945～55年の戦後復興期に形成され（形成期）、1955～75年の高度経済成長期を経て（安定期）、1975～98年の低成長期からバブル経済期に修正され（修正期）、1998年以降の構造改革期に解体されつつある（解体期）、と主張する。

図4は、現代女性のライフコースを1本の木に見立てて図示したものである(岡本・木下 2002)。同図では、縦軸に年齢および生涯発達上の段階を、そして、横軸には就業状態をとって、最終学校卒業を起点に、就職、結婚、出産といった各ライフイベントでの選択の結果、大きく分岐していく多様な女性のライフコースが示されている。

図4 現代女性のライフコースの木



出典：『新女性のためのライフサイクル心理学』13頁を一部修正。

最終学校卒業後、ほとんどの女性が就業する今日、まず最初の大きな分岐は、結婚か仕事を巡って、結婚しないで仕事を続ける「非婚就業」型への方向づけ、あるいは、結婚を選択するが仕事は結婚・出産までとする「専業主婦」型、結婚しても仕事を続ける「両立」型という3つの方向性の中で生じる。そして、現代女性の平均初婚年齢（2010年時点で28.8歳）から考えると、依然として多くの女性は30歳という年齢の壁を前にして、このような大

きな岐路に立つことになる。

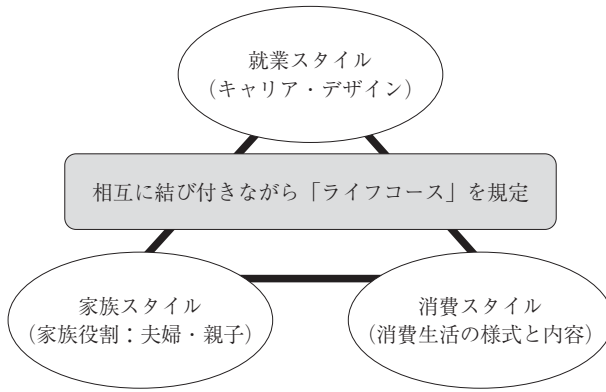
続いての岐路は、出産と仕事を巡る選択・葛藤であり、特に両立型のライフコースを選択した女性が直面する岐路である。すなわち、出産を契機に仕事をやめるか（「専業主婦」型への移行）、出産しても仕事を続けるか（多くの場合は共働きであるので「DEWKS」型への移行）、それとも子どもを持たずに仕事をつづけるか（同じく「DINKS」型）、という選択である。近年、少子化対策の一環として、様々な仕事と子育ての両立支援策が打ち出されているが、依然として出産を契機に離職する女性の数は多い。30歳代半ばに迎える大きな節目であり、岐路である。

ところで、結婚ないしは出産を契機に離職し、専業主婦となる選択をした女性も、子育てが一段落した時期に再就職すべきかを検討し始める（「中断再就職」型への移行）。一方、非婚という方向づけの下、シングルで仕事を続けてきた女性達（「結婚延期」型）、あるいは、結婚後も子どもを持たずに働いてきた DINKS の女性たち（「出産延期」型）は、出産年齢の限界を迎える40歳代に、職業を中心とした人生の再吟味を迫られる。いずれも中年期における岐路である。

どのライフコースを選択するにせよ、女性の人生には光と影が存在する（岡本・松下 2002、12-18頁）。そして、一生涯という時間軸での節目ごとに、職業上の役割と妻や母親などの家族役割を、どのようなタイミングで取得し、どれを優先させていくかで、生活と消費の有り様は大きく異なる。また、伝統的な価値観や規範意識が弱化し、結婚すること、子どもを持つこと、といった家族のあり方自体が、ある意味でライフスタイル化していく（「ライフスタイルとしての家族」）。その結果、就業スタイル、家族スタイル、そして消費スタイルが、相互に作用し合いながらライフコース選択を規定し、また、選択されたライフコースによって、それら3つのスタイルが方向づけられることにもなる（図5参照）。

そこで、以下、こうした現代女性のライフコース変化が市場構造と消費に与える影響を分析するための視点として、①多様化するライフコースのパター

図5 ライフコースと各スタイルとの関係



ン分析、②役割移行に焦点を当てたトランジション分析、③一生涯という時間軸上でのライフイベントの時機（タイミング）分析、という3つ切り口を設定し整理しておく。

## 2. 多様化するライフコースのパターン分析

女性のライフコース分析においては、職業経歴と家族経歴の相互作用に着目することが重要である（目黒 1987）。この点で、2つの経歴を組み合わせるライフコースをパターン化し、生活や消費の実態を比較・分析する手法は有用であろう。

主に職業経歴に着目して女性のライフコースを分類した場合、中断なしに継続して就業するか（「就業継続層」）、結婚ないし出産を契機に離職し、その後復職しないか（「離職層」）、あるいは、一旦離職後にまた復職するか（「復職層」）という3つのパターンに大別される。そして、そのような働き方の違いは、雇用形態の違いと相まって、生涯所得上の大きな違いを生むことが指摘されている（白波瀬 2000；真鍋 2004）。

こうした働き方の違いによる生涯所得の差は、近年よく知られるところでもあり、それが女性の就業継続意欲を高めつつ、更には就業スタイル自体を

変えていくことにもなる。いずれにせよ、働く女性の増加は、共働き世帯においては、世帯レベルでの消費水準を押し上げると共に、稼ぎ手である女性自身のための消費（自分消費）の原資を生み出すことで家計の個別化を促していくであろう。

もう一方で、働く女性の増加は、彼女たちの時間コストを押し上げ、家事活動の外部化を促しもする。特に、共働き世帯においては、妻の家計貢献度と役割意識（妻役割・母役割）の程度の差によって、家事活動の切り出し方も様々であり、多様な消費パターンが生み出されることになる（乳井 2008）。

### 3. 役割移行に着目したトランジション分析

一方、役割移行（役割の取得と喪失）に焦点を当てた場合、ほとんどの女性のライフコースは、まずは就職により職業上の役割を取得することから始まり、その後、そこで築いた職業経歴（キャリア）をベースとしながらも、結婚での妻役割の取得、出産での母親役割の取得といった新たな家族役割が加わるか否かで分岐する。これまで多くの女性は、「夫は仕事、妻は家事と育児」という性別役割分業の図式の中で、主婦役割（妻役割、母親役割）中心の生き方をしてきたが、共働き世帯が増加していく中、どの役割に軸足を置くかによって、生活と消費の有り様は大きく変わっていくであろう。

このような役割移行の観点から消費行動の変化を分析する際には、先に紹介した Moschis の概念モデルのようなトランジション分析の枠組が有用であろう。すなわち、役割移行に伴って変化する役割規範や役割アイデンティティに着目し、消費との関係性を分析する視点と枠組である。また、役割移行に伴って生じるストレスへの対処行動（コーピング）、あるいは、新たなスキルの獲得や人間関係の形成などと関連づけ、消費行動を分析する視点なども、そこには含まれる。

例えば、結婚や出産といったライフイベントでは、新たな役割が取得され、その役割と結び付いた消費が行われると共に、複数の役割間での軸足の置き方が問題となる。前述した家事活動の外部化との関連では、単に世帯所得や

時間コストといった要因だけでなく、妻役割や母親役割へのウェイトの置き方、すなわち、役割規範や役割アイデンティティ意識の有り様によっても、家事活動の外部化の仕方は大きく異なるであろう。

一方、離婚や退職といったライフイベントは、役割の喪失を伴い、生活構造における再構築・再調整を必要とする。特に、女性の場合、男性とは異なって結婚や出産を契機に離職することも多く、職業人としての役割を喪失する。離婚といったストレスフルなライフイベントへの対処行動（コーピング）としての消費、あるいは、離職・退職といった転機となるライフイベントでの役割移行にまつわる消費変化などは、重要な分析対象となるであろう。

#### 4. 生涯時間軸上でのライフイベントの時機分析

最後に、一生涯という時間軸でライフコースを捉え、様々なライフイベントが生起する時機や順序と関連づけて消費を分析する視点も重要である。

例えば、結婚や出産は、依然として、人生における重大イベントであり、そこに関連して様々な消費が発生する。しかし、近年、それらの適齢期に関する規範意識は希薄化する傾向にあり、結婚や出産の時機は分散し、順序も多様化している。その結果、早婚化・早産化が進む一方で、晩婚化・晩産化も同時進行し、所謂「さずかり婚」（あるいは、「できちゃった婚」）といった結婚と出産の時機が逆転する現象も増えている。

こうした時機や順序の変化に伴って、ライフイベントそれ自体の意味や位置づけも変化してきており、その結果として生じる消費の多様化を読み解く上での拠り所となる。

また、長寿化によって生涯時間軸が伸長する中、多くの女性が「長生きのリスク」への対応を迫られている。例えば、少子化の進展と長寿化は、結果として、子育て終了後の長い期間（「空の巣」期間）を生み出したが、そこに非婚化や熟年離婚などが加わり、「おひとり様の老後」（上野 2007）を迎える女性の数は急増している。最近では、就活や婚活ならぬ「終活」（人生の終わりに向けた活動）といった新語も登場しており、人生の終末期におけ

る消費もが分析対象となっている。

わが国におけるライフコース研究の先駆者でもある正岡寛司は、かつてライフコース分析の意義について、次のように述べた。

「瞬間の像を映した一枚のスナップショットでは、多様化と画一化の同根を十分には映し出せない。ひとりの個人の、あるいは集合体としての出生コーホートの人生という長期にわたるドラマを連続写真として映し出すことによって初めて、われわれはその根っ子を掘り当てることができるのである。まさしくライフコース分析は人生ドラマを変化する長い過程において捉えようとする方法なのである」(正岡 1987、171頁)。

さしずめ、従来のライフスタイル論は静止画の理論、ライフコース論は動画の理論ということであろうか。鋭い感性で切り取ったスナップショットは1枚でも多くを語るが、一方では、長編の記録映画にも捨て難い魅力がある。そして、後者には根気のいる作業が必要とされるが、今求められているのは、そのような作業なのであろう。

(筆者は学習院大学経済学部教授)

#### [参考文献]

- Andreasen, A. R. (1984), "Life Status Change and Changes in Consumer Preferences and Satisfaction," *Journal of Consumer Research*, Vol. 11, pp. 784-794.
- Baker, A., Moschis, G., Rigdon, E., and A. Mathur (2011), "Effects of Family Structure on Compulsive Buying: A Life Course Perspective," *Advances in Consumer Research*, Vol. 39, p. 422.
- Baker, A, Mathur, A., Fatt, C. K., Moschis, G., and E. E. Rigdon (2013), "Using the Life Course Paradigm to Explain Mechanisms That Link Family Disruptions to Compulsive Buying," *Journal of Consumer Affairs*, Vol. 47 No. 2, pp. 263-288.
- Baltes, .B., Reese, H. W., and L. P. Lipsitt (1980), "Life-span Developmental Psychology," *Annual Review of Psychology*, Vol. 31, pp. 65-100.
- Belk, R. W. (1988), "Possessions and the Extended Self," *Journal of Consumer Research*, Vol.

- 15, pp. 139-168.
- Benmoyal-Bouzaglo, S. and G. P. Moschis (2009), "The Effect of Family Structure and Socialization Influences on Compulsive Consumption: A Life Course in France," *International Journal of Consumer Studies*, Vol. 33 No. 1, pp. 49-57.
- Clausen (1986), *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice-Hall (佐藤慶幸・小島茂訳 (1987)『ライフコースの社会学』早稲田大学出版部).
- Elder, G. H. Jr. (1978), "Family History and the Life Course," T. K. Hareven (ed.), *Transitions: The Family and the Life Course in Historical Perspective*, Academic Press, pp. 17-67.
- Elder, G. H., Johnson, M. K. and R. Crosnoe (2003), "The Emergence and Development of Life Course", in J. T. Mortimer and M. J. Shanahan (eds.), *Handbook of the Life Course*, Plenum, pp. 3-19.
- Gaeth, G. J. and T. B. Heath (1987), "Cognitive Processing of Misleading Advertising in Young and Old Adults: Assessment and Training," *Journal of Consumer Research*, Vol. 14, pp. 43-54.
- Gatignon, H. and T. S. Robertson (1985), "A Propositional Inventory for New Diffusion Research," *Journal of Consumer Research*, Vol. 11, pp. 849-867.
- Giele, J. Z. and G. H. Elder, Jr. (1998), *Methods of Life Course Research: Qualitative and Quantitative Approaches*, Sage Publications (正岡寛司・藤見純子訳 (2003)『ライフコース研究の方法：質的ならびに量的アプローチ』明石書店).
- Hirschman, E. C. (1992), "The Consciousness of Addiction: Toward a General Theory of Compulsive Consumption," *Journal of Consumer Research*, Vol. 19 pp. 115-179.
- John, D. R. (1999), "Consumer Socialization of Children: A Retrospective Look at Twenty-five Years of Research," *Journal of Consumer Research*, Vol. 26, pp. 183-213.
- Lee, E., Mathur, A., Fatt, C., and G. Moschis (2012), "The Timing and Context of Consumer Decisions," *Marketing Letters*, Vol. 23 No. 3, pp. 793-805.
- Lee, E., G. P. Moschis, and A. Mathur (2001), "A Study of Life Events and Changes in Patronage Preferences," *Journal of Business Research*, Vol. 54, pp. 25-38.
- Mayer, K. U. and N. B. Tuma (eds.) (1990), *Event History Analysis in Life Course Research*, University of Wisconsin Press.
- McAlexander, J., J. W. Schouten, and S. D. Roberts (1993), "Consumer Behavior and Divorce," in J. A. Costa and R. W. Belk (eds.), *Research in Consumer Behavior*, Vol. 6, JAI, pp. 153-184.
- Moschis, G. P. (1987), *Consumer Socialization: A Life-Cycle Perspective*, Lexington Books.
- Moschis, G. P. (1992), *Marketing to Older Consumers: A Handbook of Information for Strategy Development*, Praeger.
- Moschis, G. P. (1994), *Marketing Strategies for the Mature Market*, Praeger.
- Moschis, G. P. (1996), *Gerotographics: Life-Stage Segmentation for Marketing Strategy Development*, Quorum Books.
- Moschis, G. P. (2007), "Life Course Perspectives on Consumer Behavior," *Journal of the Academy of Marketing Science*, Vol. 35, pp. 295-307.



- Nguye, H. V., Moschis, G. P. and R. Shannon (2009), "Effects of Family Structure and Socialization on Materialism; A Life Course Study in Thailand," *International Journal of Consumer Studies*, Vol. 33 No. 4, pp. 486-495.
- Oropesa, R. S. (1993), "Female Labor Force Participation and Time-saving Household Technology," *Journal of Consumer Research*, Vol. 19, pp. 567-579.
- Rindfleisch, A., J. E. Burroughs, and F. Denton (1997), "Family Structure, Materialism and Compulsive Consumption," *Journal of Consumer Research*, Vol. 23, pp. 312-325.
- Robert, J. A., C. Manolis, and J. Trnner, Jr. (2003), "Family Structure, Materialism, and Compulsive Buying," *Journal of the Academy of Marketing Science*, Vol. 31 No. 3, pp. 300-311.
- Wilkes, R. E. (1995), "Household Life-cycle Stages, Transitions, and Product Expenditures," *Journal of Consumer Research*, Vol. 22, pp. 27-42.
- 青井和夫 (1999)『長寿社会を生きる：世代間交流の創造』有斐閣。
- 安藤由美 (2003)『現代社会におけるライフコース』放送大学教育振興会。
- 上野千鶴子 (2007)『おひとりさまの老後』法研。
- 大久保孝治 (2013)『日常生活の探究：ライフスタイルの社会学』左右社。
- 岡本祐子・松下美知子編 (2002)『新・女性のためのライフサイクル心理学』福村出版。
- 落合恵美子 (1997)『21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた (新版)』有斐閣。
- 落合恵美子 (2000)『近代家族の曲がり角』角川書店。
- 嶋崎尚子 (2008)『ライフコースの社会学』学文社。
- 嶋崎尚子 (2011)「ライフコース論の現在」藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂、112-124頁。
- 白波瀬佐和子 (2000)「女性の就業と階級構造」盛山和夫編『日本の階層システム：ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会、135-155頁。
- 菅原ますみ (2005)「ライフコース研究の新しいかたち」遠藤利彦編著『発達心理学の新しいかたち』誠信書房、260-293頁。
- 乳井瑞代 (2008)「働き方の多様化が消費を変える」青木幸弘・女性のライフコース研究会編『ライフコース・マーケティング：結婚、出産、仕事の選択をたどって女性消費の深層を読み解く』日本経済新聞出版社、91-117頁。
- 正岡寛司 (1987)「女性のライフコースの多様性と画一性」、経済企画庁国民生活局編『新しい女性の生き方を求めて：長寿社会における女性のライフコース』、大蔵省印刷局、171-175頁。
- 真鍋倫子 (2004)「既婚女性の就労と世帯所得間格差のゆくえ」本田由紀編『女性の就業と親子間関係』勁草書房、21-36頁。
- 目黒依子 (1987)「家族経歴と職業経歴からみた女性のライフコース」経済企画庁国民生活局『新しい女性の生き方を求めて：長寿社会における女性のライフコース』大蔵省印刷局、176-179頁。
- 森岡清美・青井和夫 (1985)『ライフコースと世代：現代家族論再考』垣内出版。
- 山田昌弘 (2005)『迷走する家族：戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣。